



和漢文操卷之三

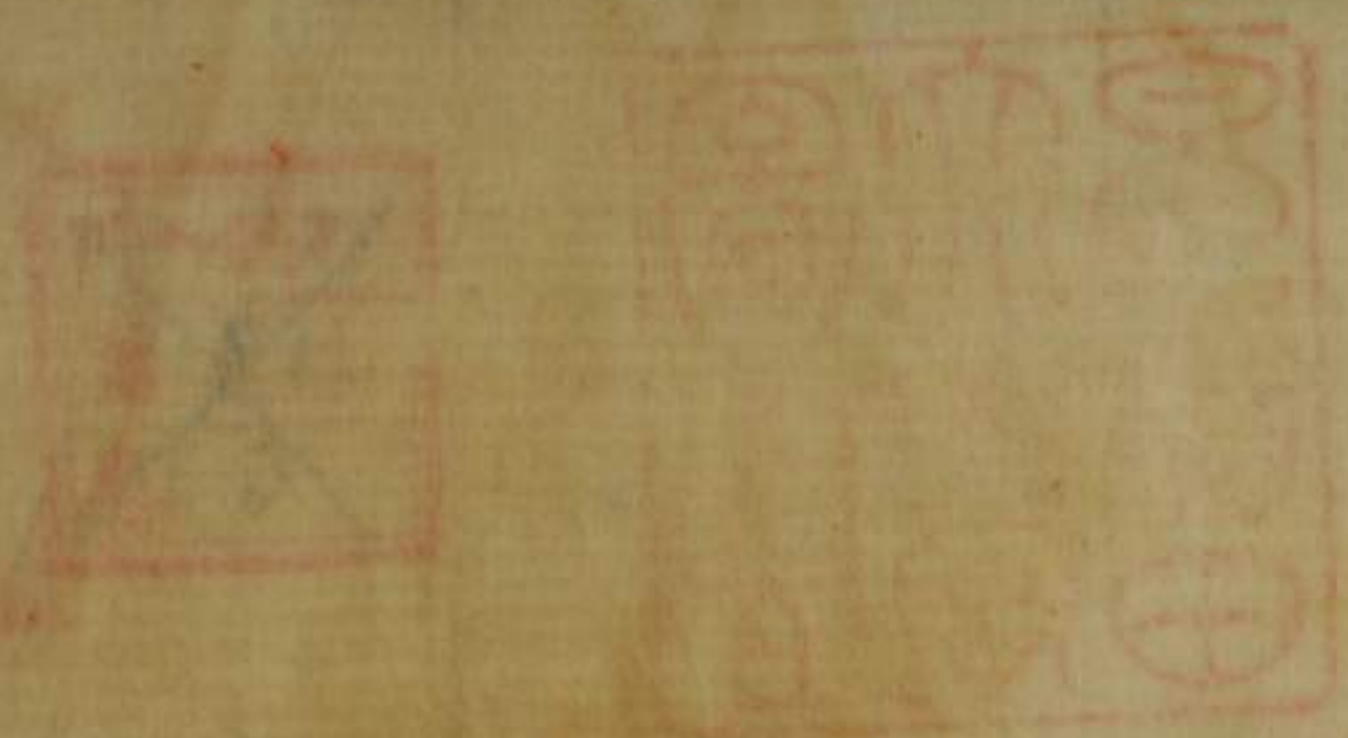


○行類

△連能互照序

連二信

亦おやしきまにれ指句と重なるに拙著と文章  
の違跡ありて其にほもの明るやしく例の如き也  
とていりて拙の著せしむるあるも其れも拙の  
宗様より其の著しきあるも其れも拙の  
著せしむるにほもの明るやしく例の如き也





利門  
81  
蒲卷



和漢文操卷之三



○行類

△連他五照序

連二信

或おちしきとせおむとあるに和漢一文章  
の遺跡ありてはよはるの味よく御のおむ  
まにりて櫛の香れむとあるもその和の  
心様よくとあるの類とあるに和漢一文章  
の類とあるに和漢一文章とあるに和漢一文章

和漢文操卷之三



老翁のたもとまゝうへ色狭しけ翁句とあはれ  
我れの上よりとらりとらり

櫛のうつらんやほしくむと  
時をまゝも歌ふやうの相

かくて老翁のうへ色狭しけ翁句とあはれ  
よ余はなれとぬきしそと連歌之能諧と  
し相の時も此古歌とありてそと能諧之  
連歌といふ二事ともなぬかおめとかくて  
まと言ひの余情しそと連歌といふ一虚字の  
之照りておとらふんと翁句の之後とまゝに

と我々もくも詞と守時をおかひもくも翁句  
して連歌のうへ色狭しけ翁句とあはれ  
幸と暗記してはらしく凡新のほしとありて  
諸趣を詩とあはれしく新駿あり聯句あり歌朝  
いふにけしむて連歌あり能諧ありつれも  
たの意ありし人共々も翁句のうへ色狭しけ  
けぬし連歌のうへ色狭しけ翁句とあはれ  
かゝるもくも能諧と一虚とありて翁句とあり  
同とおはれしくも翁句のうへ色狭しけ翁句  
よん誠と翁句とありし人共々も翁句のうへ



くら懐中の編書に詠諧之連歌一巻あり  
 その世に言篇の詠諧師のほ奥に連歌の書  
 とあり詞の詠諧とあり詠言連歌の言と  
 とありこの編書に空もふんや人の篇の詠諧  
 の儒者と吾らの詠文とやうに併りて詠言の  
 詠言とありして麗堂のはらへをいふは  
 といふに松陵の詠文とあり歌とあり西の詠文  
 とありよふて又儒の世に連歌の書あり詠  
 の書あり詠諧と連歌あり連歌と詠諧  
 ありといふや連歌の書と麗堂の書といふに

漢よかもの圓後ありて古今集のよみし詠  
 の号ありとや今も連歌の書ありとや人の  
 かゝり詠ありとやねなく詠の書あり詠  
 の書ありとや今も連歌の書ありとや人の  
 の麗堂ありとや今も連歌の書ありとや人の  
 といふに今とありて言のよみし詠とあり  
 あれと言下にありて言のよみし詠とあり  
 といふに今も連歌の書ありとや人の  
 といふに今も連歌の書ありとや人の  
 といふに今も連歌の書ありとや人の  
 といふに今も連歌の書ありとや人の



小名姓とす用て附合をむ向ふくはと  
 るもぬ時の中せしむ連音のまよとくはら  
 能言の解とまらうくはし草草のまあ草草  
 とつねまらばやむまカそれ連歌と能言と  
 せしむ和音のえ申ふことねし世に中きふ  
 へく家まねいも所とけ所とのまらと或は  
 連歌と能言と或は能言と連音ともは  
 て詩の人の花漢和と交るうとくはれ  
 連音の情のまらとまらひねらり能言のまら  
 うつらと他へて連能一座の附合あんとまら情

のまら地を面くのけ題うて大和の風物のみ  
 せむうとあま 佛堂の流とほり世はれ  
 人知しうたまらてくまらぬ錦花とまら  
 めしはらとまらけ一解と能言減たの大ま  
 るくするまら奥座の大まらまらむ世に  
 人知のまらるまらまらまら守り詞とほり  
 能言の座よのまらてくまら能言はらりもはれ  
 はらるまらてけはのまらまら人まら連音の艶花  
 とりてまらて今つま連能まららむまらまら  
 花のまらららまらまらまらまら小町まら粉と



くらむいもたまは川か舟をこららるるしやまを  
 連能のらやうくにきくひの耶那ふかひあゆむ  
 と先ひてしむさきく連二つよこのあゆむ  
 てかくとを照の序とさむさくくそのあゆむ  
 百々の功とさけまてそのあゆむと一也の宮かん  
 人よくさきかえれとさるる一人きく言信の預信  
 とさるるあゆむと

惟時享保三のり十月十二日親書の牌ふ  
 一書と焼く薫誦再おてのの

連能歌仙行

改正珍

一さきさきけさきめれ此のさきさき  
 二のめそれのさきとるさきさき  
 三のさきさき人のさきさきさきさき  
 四の集さきさきさき市北買か  
 五のさねおや月のさきさきさきさき  
 六のさきさきさきさきさきさき  
 七のさきさきさきさきさきさき  
 八のさきさきさきさきさきさき  
 九のさきさきさきさきさきさき  
 十のさきさきさきさきさきさき

蓮二  
 光純  
 乙由  
 珍  
 二由  
 純

一書と焼く







月々入朝の月々のあつたに  
 ちいさなきいし舞うるまは  
 随分のすん中へまを 橋つくり  
 といふうちわいふをいれり  
 塵の山第もたそに 地あのみ  
 こやしあつたゆめ ちいさな  
 るやうい暖筆集とるれは 藤下  
 といふくはれは馬代ゆめ

珠 二 由 純 二 珠 由 純

○作者列傳

正珍、枚木氏ニテ伊勢ノ山田ニ師範トス連歌  
 八里村家ニ通称セリトソニ在年ヨリ家産ニ

抱ラス家法ハ建治ノ式目ニ據テカラ凡美ハ字祥ノ方角  
 ニ遊ル一生不羈ノ隱逸人ナリ「光純ハ其内ノ高才ナリ  
 博ク孔内ノ詩書ニ通ヌ姓ハ木林氏ニテ師職ヲ家ト  
 セリ東堂ハ今ノ俳名ナリトフ乙由ハ同ク山田ノ三座ナ  
 當時ニ俳諧ノ名近ナリ昔ハ東老坊ニ寝席シテ  
 新百韻ノ老ニ遊ル中ハ涼菟奇ニ鼓舞舞シテ正徳ノ  
 曲ヲ尽スニ集ハ俳諧ノ要ニシテ祖ハ羽藏後ノ時世林ト  
 云々其後中川ノ家ヲ適テ今ハ木林ニ遊リトフ

△俳諧求韻序説

兼短歌行

土方以立

眞儀物云歌と韻字と用(まあり)と十一字



の歌と才と句の終字と初約と一才又句の終字と  
 終約と一約とつらつらもさく取らざるを也歌とい  
 又七歌と才と句の終字と初約と一才又句の終字  
 と二約と一かくあさく替りて約とつらつら短き  
 有らざるを短歌とい喜撰式わらひ新撰髓  
 古今集より如牛者とい或云訪よりらうのたさ  
 歌と我國の詞あり句とちありわらひわらひ  
 いふのちり一短歌ハ賦あり長歌ハ五言の詩  
 旋頭二言ハ江南の曲混本二言ハ越調の詩連言  
 ハ聯句あり廻文まじりかみひくあさくあさく

準ゆり不しとありまじりと也言短言也といは  
 ありて奥儀抄よりわげ存よりあはれ能借し求  
 韻の何はあはれ遠くを奥儀抄より後をい  
 近くをいお文温し假名のつらつらとつらつら  
 又や連歌の聯句ありとい能借しその初字と  
 といひて俳諧之連歌といふ一といふあはれに  
 栢梁星の聯句あれといふくに酒折宮の連歌  
 ありて漢武帝も日本武もけるの祖とあはれに  
 せもく末韻の式月と奥儀抄も二種の約例  
 ありて又句と兼韻といふ言詠と細韻といふ



麻韻とやまたまの音韻といひ細韻といひの  
言葉とつよけり歌の束韻とつ二行と辨の是  
ありて短歌といひ長歌といひ雙及本といひ  
短歌と唯すゝる絶句也

雙及本

以テ六句ヲ五ニ絶テオニ句終字ヲ五ニ初韻ト  
オ六句終字ヲ五ニ終韻ト

あけり此れあけりいりやまのたれあやうも  
あけりあけりあけりいりやまのたれあやうも

短歌

以テ五句ヲ五ニ絶テオニ句終字ヲ五ニ初韻ト  
オ五句終字ヲ五ニ終韻ト

あけりあけりあけりいりやまのたれあやうも  
あけりあけりあけりいりやまのたれあやうも

長歌

以テ五句ヲ五ニ絶テオニ句終字ヲ  
五ニ初韻ト轉々如此

あけりあけりあけりいりやまのたれあやうも  
あけりあけりあけりいりやまのたれあやうも

あけりあけりあけりいりやまのたれあやうも  
あけりあけりあけりいりやまのたれあやうも

あけりあけりあけりいりやまのたれあやうも  
あけりあけりあけりいりやまのたれあやうも

あけりあけりあけりいりやまのたれあやうも  
あけりあけりあけりいりやまのたれあやうも

はれい和風の韻例とありおに和歌と又句ありて  
二韻ありてはれい和風の韻例とありおに和歌と又句ありて  
君不聞のこきまへ和歌此ひまへあけりあやうも  
のこきまへ起語としていれあけりあやうも  
四句二韻といひはれい和風の韻例とありおに和歌と又句ありて



のるも換韻の言句も同韻とあはれりるも今  
 の論より用ひかゝるもあはれりるも今  
 例より長篇の言句も論より歌行のれ換韻  
 と用ひに或は四句も換へ六句も換へ八句も十句  
 ちりも粗あるも一奥儀の言句も後節ありは  
 今や和漢の例とすして此借の言句も求韻とす  
 ちの言句の尾字と初韻とす一才二才と傳句  
 ぬじ一志れは言句と韻と六句も韻と七句も  
 換じとす一才の言句も他韻とぬじとす尾字  
 との韻とす一才の言句の尾字と用ひりて

是れは漢家の律詩も我々の漢和の詩も  
 とうよりのありて才の言句の尾字と初韻とす一才と  
 一才とす一才と一韻と用ひりて今や一巻の  
 換韻の短歌行とす一韻とす一歌仙行と六句も  
 韻とす一長歌行と八句も五韻とす一歌仙行と  
 六六も六八も七七も付一巻六章の詩ありて  
 韻とす一換韻とす一歌仙行と六句も  
 の言句と八韻とす一歌仙行と六句も  
 一才の言句も不自然あるも一才の言句も  
 の言句も一才の言句も一才の言句も







求韻短歌行

良壺安幸

香久山のこらにわすやそむれ

言もつあ<sup>ワホラリ</sup>局折

扇とて露くむてあふく

湯あもつた<sup>ワホラリ</sup>た<sup>ワホラリ</sup>崖とせけ

雲末を何そく余ふとせあり

岸りの磯の橋のあらし

山の端北月きらしくとまら

席も萩おく<sup>ワホラリ</sup>屍のくハ凡

蓮二

方立

乙入

二

峯

文

登

得又故入秋をきいさるね巻堂

た官も又百いきく<sup>ワホラリ</sup>あく

言をさるらんわく<sup>ワホラリ</sup>わつりむ

はあふ<sup>ワホラリ</sup>あ<sup>ワホラリ</sup>船と<sup>ワホラリ</sup>泳む<sup>ワホラリ</sup>あ<sup>ワホラリ</sup>ら

大坂や中坂と<sup>ワホラリ</sup>波の<sup>ワホラリ</sup>ま<sup>ワホラリ</sup>く<sup>ワホラリ</sup>れ

ひり<sup>ワホラリ</sup>ド<sup>ワホラリ</sup>から<sup>ワホラリ</sup>ふと<sup>ワホラリ</sup>君と<sup>ワホラリ</sup>あ<sup>ワホラリ</sup>れ

以のおれ<sup>ワホラリ</sup>猫め<sup>ワホラリ</sup>か<sup>ワホラリ</sup>ら<sup>ワホラリ</sup>ひ<sup>ワホラリ</sup>の<sup>ワホラリ</sup>と<sup>ワホラリ</sup>あ<sup>ワホラリ</sup>れ

ち<sup>ワホラリ</sup>ら<sup>ワホラリ</sup>れ<sup>ワホラリ</sup>世<sup>ワホラリ</sup>の<sup>ワホラリ</sup>一<sup>ワホラリ</sup>桶

ま<sup>ワホラリ</sup>ら<sup>ワホラリ</sup>れ<sup>ワホラリ</sup>と<sup>ワホラリ</sup>調<sup>ワホラリ</sup>や<sup>ワホラリ</sup>あ<sup>ワホラリ</sup>脚<sup>ワホラリ</sup>も

深<sup>ワホラリ</sup>お<sup>ワホラリ</sup>の<sup>ワホラリ</sup>る<sup>ワホラリ</sup>れ<sup>ワホラリ</sup>く<sup>ワホラリ</sup>く<sup>ワホラリ</sup>

二 峰

二 文

二 登

二 文

二 峰

二 文

二 登

二 峰

二 登



されども此は穢も水も月也 歌  
 穢もばくちもと殿もあつらふ  
 せつりし宿りしものきとあまて  
 前と後しきあはれしけ  
 暮ひとむいしけの奥もあつらふ  
 連歌を奪ふ 子女のなまこ  
 二文 峰 二文 三

○係云は行の連歌之能清とやいふ者句と地続の  
 佛制衣と掲めるより一篇を食て姫舞の句は七  
 五と座の二句にたりて座のらぬと手懐きたり  
 せしむらひ入席のあし吹かざる萩のうらぬと座の

一字とよもばとてとてと錯綜して連歌の裁入  
 と倒とてとてはよる表の言扱とつてとれとと  
 轉倒の絶妙と稱とてとて今もてとてのま行  
 とつねの奉句の裁断あり方取まのつとてと能清  
 の求韻とてとてと百世の濫觴とてと奉句と  
 此式の惣括して我々の支配とてとてとてと幸  
 二句主の順とゆつりて黄老人の所法とてとてと  
 とかくとたあやまちと道むとてと蓮二のつとて  
 ありむしとてのつとてとてとてとてとてとてと  
 寄衣とてと連歌の古懐席とてとてとてとてと  
 中しとてとて人のまの巻とてとてとてとてと  
 ちらとてとて廟のたに宗祇の服ありはてとてと



名張いづり七句同じま春とちりて老人も奉句と  
 らしきもりや老木よむとてよは向のむありとら  
 忍るもそ剛よとてりて春向の若と再進まき  
 敏捷の夢と我家の替あう連歌とちり連歌  
 と春よふ心とれく今かく求韻の自在とやめい  
 て千歳の孔子もちくされむ頌挫と能語の  
 こと地ふれい剛の虚実とあせりて我誠と北行此  
 大膽ちり評者も一様とけり。おあしるく剛の  
 ことと也作者と越の石動イヌキは位まらつれと和漢の  
 惜まらして和春の例より喚て松子嵐の之  
 とよも地と文操の選場より慧く庵記よ  
 ともいれありとめくとも記よ互見を

求韻歌仙行

川乙由

り秋のるくく心とおもふら  
 赤瓦心よ草葉のまられ  
 持衣いそ春の園とちりかげ  
 猫殿あふるとも喉の中  
 一草のふぬと草司にねらふ  
 ちてつるのまらふか  
 ねの本此骨のそいと括く  
 打らぬらむとよおりの中子

兔土  
 蓮二  
 表如  
 土  
 由  
 如  
 二



蓮うあけくうあくくけき甚弱い  
 染く布中とあかき金つん  
 嵐うあてち海くうらりる  
 馬子よ作げのあるいさ  
 ねくさく比丘危きも備下  
 肉之月い月とあもをれ  
 方角をも心のみく一雨に  
 じく坊く粘活の指あへ  
 獲すこれ言くお柳く一歌き  
 二云のちられえい川き

由二如由士如二士由

二  
 葉形くつとけを興か  
 地をよあきく二ちと危係  
 起るおまき子の日れうつり  
 ちめわをれ南天くう  
 耳くちきおの豆腐あう  
 便をく比敷のせんきく  
 かせちせし筆のうさうい  
 牡丹とあねははの業を  
 入れの之本とほりるあもを  
 冠かどのううあうさう

二如由士如二由士如二



















我名と削の華表人ふゆつる方とありとて文鑑よ  
石歳行のこもき遺稿よわおの又幸とておんくわ各  
と題をりれく先解よ十各のそ一ある一

△大和聯句序

垂歌仙行

渡白狂

詩歌者夫凡雅之花而所謂詩變而為  
騷騷變而為詞皆可歌鼻則詩與歌者  
從音訓之違永詩了則曰作若永歌了  
則曰訓歷總者道之優游而遊俗談笑  
語共不忘意之凡雅之謂也季友在則

其詩有聯句而其歌有連系事者從詩  
歌之独有面白麼我云人云聯其時之  
意也則可弗諸越之人與大和之人為  
物語詩歌矣耶初社月夜兮花且兮見  
給侍人之心心而知召賢敷愚也鼻矣  
貫之之詞麼為此意矣乎抑鼻聯句之  
始則或曰上則唐虞之廣歌下則漢武  
之栢梁共或曰聯句古無此法自韓愈  
孟郊始共或曰諸公已有聯句之詩謂  
自韓愈始者非也共於茲思聯句之泄



觴則如蘓瞻與蘓由之應對或者四言  
 或者六言五言七言者勿論而為言合  
 上與下則漢曰聯句居和曰連歌歷古  
 集之證文麼數多也左有厚纂為成一  
 卷物者但可謂自韓孟始尔哉左有  
 如園雞納涼者連續一題之意而或者  
 成百韻成五十韻言則謂兩吟之詩矣  
 其後我朝如江心策彥者觀前起後而  
 為似今之連俳共譬則如以秋月對山  
 堂以梅花對荊棘唯合十二門之各同

而物無體用之差別者字行義暗許之  
 黑豆而謂詩歌無姿情之論矣夫先師  
 大背所遊洛之相國寺日有一聯之名  
 對鳳兮桐倒掛章知客蝶也妻在周白龍子  
 此一對者膾炙其世而稱倒掛與在周  
 之意對止乎遺稿魚書二倒掛下事坡詩二出テ厚二似  
掛心此故二各トセリトツ在周ハ齊物論ニ蝶ハ蝶也覺ハ在周  
也ト云ハ然ハ在周ハ即蝶トナリ妻トハ妻化也胡蝶ト云ハ  
胡ニ右語ノ款入テハ對ハ五山ノ會合聯句ニ座ノ字近モ  
附アリテラハ對ヨリ名ヲ移シテ以テ妻蝶子ト云リトツ  
 從是江西湖南之間念遺聯句之名其  
 與所白龍子與者先師之聯句名也其



後之祿之始也其在武江之邑蕉庵而  
 素堂與故翁夜話之次撰之曰月日記  
 述往古評漢和之為不自在當時論聯  
 句之為不吟味而其夜試有一聯之隔  
 對唐土有芳野櫻將妬海棠山素堂揚州  
 無伏見桃被惡山薑白龍子  
○遺稿魚書此一  
 聯大和聯句僅  
 歸于此故古今集依諸歌摘唐土芳野ト云ハ本  
 ヲリ聯句ノ結構ハ和漢ノ兩用ヲ通スキ厚ニソ山薑ハ本州  
 ニ出テ白木ノ名ナリ揚州ノ產物ニテ柳李ヲ忘ル物ナリトソ  
 然ハ此對ノ稀ニ所ハ唐揚州國名ヨリ土州ノ地形ヲ對シ增シテ  
 山海圖堂ノ一名ニ用ラ附ケタル也等ヲ意對トモ字對トモ是テ  
 定規ト大和ニ聯句ノ鑑ナリトソ彼記ハ漢和ヲ論談セリ  
 如斯者我家建詩聯句之一格而和漢

可通假名真名之用為也率哉謂大和  
 聯句者其樣似鳳城之五言聯而全用  
 我朝之俗談居其言學羅山之七字城  
 而爾亦不為者也其意如何也則聯句  
 者本出詩之變律而對其字其字之姿  
 了共不運其題其題之情譬則如以牛  
 對僧以松對鶴句對字對者不及言意  
 對知聯句之作不作了哉然則月尔者  
 有日星之體而花亦者有枝葉之用則  
 俟如玉椿與系柳漢如山色與水光



可以鳥之聲對梅之香了則介部隨類  
而為附分重毛字某所可謂聯句之註  
用厚故于然對十二句之字耳則從乾  
坤時候之二句不及器賦食服之差別  
態藝虛複者似有名而無形而矣今也  
我家之所建者如句每字分姿情之品  
而逐一定附方之法譬則以古風對新  
月此類曰文字之姿矣字面者對風月  
了共古風者風俗而弗天象故也譬則  
以對鵬對團子此類曰文句之情矣字

面者全不對了共蚌鵬者言麥粉之搗  
入則也此外隨字行之輕重而不離姿  
情之二事者爰以郭公之一卷可知大  
和之凡例也初謂古聯句之法者不知  
為孰代誰人之提凡從五十韻至百韻  
然其今之聯句者長了則之數韻礎自  
有自己之愛要先者從二十四之短歌  
行用之十六之歌仙行而長共唯可限  
長歌行矣手則五山之標式亦麼有  
歌仙聯之沙汰與所次謂去嫌之古式



者所謂地名人名氣植之類者都可隔  
二聯同字者量字行之輕重而可隔十  
句元句共不曉其法其式之道理則如  
童部之習心經欲覺無的果今止將為  
大和之聯句亦者衣不替連飾之式分  
四折八面之表裏而可效四花八月之  
法式矣乎此故今之歌仙亦者以始中  
終成折附止矣四十四麼五十韻麼效  
此例些爾有則曰連歌之漫和居曰能  
諧之和漫共式者可任其座之宗近厚

哉乍去捨行回華對類初子士麼偏冬  
僧麼及著述而知平反事者殆無所越  
聯句物唯從東冬至咸嚴迄知平色  
之韻字則上去入之之韻者有我不知  
而知之理果衣有人者不及姿情之塩  
梅溪尋城南兮侯櫻城西兮效韓孟江  
策之達者而眼儒書兮物佛經兮混尚  
覺地々之故事古語些知和訓漫音之  
可假用真於與松待之訣至則縱夫謂  
學向之果敢遣矣斯而知其學之用與



無用<sub>ラ</sub>了<sub>レ</sub>則知<sub>レ</sub>詩歌有<sub>ラ</sub>今日之優游知<sub>レ</sub>聯  
句有<sub>レ</sub>姿情之品而誠<sub>ニ</sub>被<sub>レ</sub>謂<sub>レ</sub>和<sub>レ</sub>侯<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>文人  
矣然則聯句之<sub>レ</sub>用<sub>レ</sub>也識<sub>レ</sub>論語之<sub>レ</sub>所謂  
蒼鳥之名而謂<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>學文之<sub>レ</sub>始終矣夫

聯句歌仙行

郭<sub>ニ</sub>公<sub>ニ</sub>松<sub>ニ</sub>獨<sub>ニ</sub>立<sub>ニ</sub> 芋頭雙  
橋<sub>ニ</sub>落<sub>ニ</sub> 離卦  
王<sub>ニ</sub>炊<sub>ニ</sub>新<sub>ニ</sub>月<sub>ニ</sub>芋 橋尼子  
噫<sub>ニ</sub>一<sub>ニ</sub>驚<sub>ニ</sub>山<sub>ニ</sub>雀 橋尼子  
杜<sub>ニ</sub>君<sub>ニ</sub>鶴<sub>ニ</sub>雙<sub>ニ</sub> 橋尼子  
家<sub>ニ</sub>榮<sub>ニ</sub>調<sub>ニ</sub>肺<sub>ニ</sub>藏 橋尼子  
筆<sub>ニ</sub>堀<sub>ニ</sub>古<sub>ニ</sub>風<sub>ニ</sub>薑 芋頭雙  
思<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>隱<sub>ニ</sub> 芋頭雙

中  
沽<sub>ニ</sub>諸<sub>ニ</sub>茶<sub>ニ</sub>宇<sub>ニ</sub>袴  
園<sub>ニ</sub>寺<sub>ニ</sub>鷄<sub>ニ</sub>無<sub>ニ</sub>海  
顧<sub>ニ</sub>身<sub>ニ</sub>浮<sub>ニ</sub>竹<sub>ニ</sub>他  
衛<sub>ニ</sub>士<sub>ニ</sub>待<sub>ニ</sub>油<sub>ニ</sub>賣  
平<sub>ニ</sub>家<sub>ニ</sub>花<sub>ニ</sub>將<sub>ニ</sub>敵  
彼<sub>ニ</sub>岸<sub>ニ</sub>錢<sub>ニ</sub>團<sub>ニ</sub>子 芋頭雙  
身<sub>ニ</sub>貧<sub>ニ</sub>常<sub>ニ</sub>嚼<sub>ニ</sub>老  
題<sub>ニ</sub>騶<sub>ニ</sub>源<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>位  
捧<sub>ニ</sub>文<sub>ニ</sub>梅<sub>ニ</sub>早<sub>ニ</sub>咲  
娘<sub>ニ</sub>鑑<sub>ニ</sub>照<sub>ニ</sub>親<sub>ニ</sub>園

痛<sub>ニ</sub>也<sub>ニ</sub>木<sub>ニ</sub>綿<sub>ニ</sub>裏  
桂<sub>ニ</sub>川<sub>ニ</sub>猿<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>整  
饑<sub>ニ</sub>渡<sub>ニ</sub>淺<sub>ニ</sub>第<sub>ニ</sub>荒  
代<sub>ニ</sub>官<sub>ニ</sub>停<sub>ニ</sub>末<sub>ニ</sub>商  
秋<sub>ニ</sub>氏<sub>ニ</sub>蝶<sub>ニ</sub>先<sub>ニ</sub>嘗  
節<sub>ニ</sub>供<sub>ニ</sub>化<sub>ニ</sub>鮮<sub>ニ</sub>腸 橋尼子  
口<sub>ニ</sub>滑<sub>ニ</sub>頰<sub>ニ</sub>互<sub>ニ</sub>倡  
式<sub>ニ</sub>師<sub>ニ</sub>又<sub>ニ</sub>互<sub>ニ</sub>郎  
先<sub>ニ</sub>紫<sub>ニ</sub>竹<sub>ニ</sub>初<sub>ニ</sub>拈 橋尼子  
母<sub>ニ</sub>衣<sub>ニ</sub>韜<sub>ニ</sub>武<sub>ニ</sub>光

收錄卷三

廿四



鳥藏 三日月

終

鐘 而白蘆 穂掃尾子

白宮 謔 帚 様

日本 治 花 幕

鵲 渡 二 星 霜

孟 十 益 菊 香平頭雙

流 殿 惜 鉉 坊

春 初 調 柳 相

註曰 ▲發端ノ聯ハ全ク大和ノ新格ニシテ郭ムニ和歌ノ情ヲ結  
杜若ニ俳諧ノ姿ヲ示スニ様ハ凡雅ノ本懐ト云ハ本言ノ漢家ノ  
例ヲ見ルニ生類ト植物ノ對ハ文法詩格ノ常ナルヲ何トテ中古ノ  
聯句ヨリ古人ノ法格ヲ失ケテ然レハ今ノ稱スル所ハ郭ムノ松ニ  
杜若ノ鶴ト當季ノ花鳥ヲ錯綜シテ郭杜公若ノ字意  
ヲ配リ独雙ノ數量ヲ合セタルニ是レハ多ニ效トナリ

▲此聯ハ謎文ナリ 離ハ板橋ノ中断ニ喩(肺ハ五臟ノ金ヲ貯フ

離火肺金ハ五行ノ意對ニシテ臟ト藏トハ通用ナカラ

卦字ニ奇絶ノ對ト云ハ例ノ觀ハ杜若ニ橋ノ一字ヲ

當セテ卦名ニ假橋ノ姿ヲ見(キナリ

▲此聯ハ假對ナラバ凡月ニ大和ノ働ヲ稱スレ然ルニ古風ハレカ苗

トハ論語ノ詞ニ安ラ認タル儒者ノ養生ヲ笑(ルナリ 堀ノ

一字ハ筆耕ノ語勢ヨリ當季ニ句作ノ働ト云ク炊堀ノ

▲此聯ハ俳諧ニシテ稱スル所ハ一ト山ハ次トノ字對ノ配ヲ見ル

キナリ 論語ニ季子又子ニ思ト云ルヨリ句情ハ通道

ノ世ヲ隱シテ 轉ノ如ク穴居ストソ邦無道則隱 氏云ル

字毎ノ裁入ヲ稱スレ觀ハ机石ノ山雀ハ畫ナリ



▲此聯ハ古語ノ裁入ナリ論語ニ求テ善言買而估諸トアリ  
對ハ小町カ付ナリ幸都學少町ニ痛リヤ小町カ付ナリ  
ハハ優女ト云トアリテ首ニ表ラ掛スルモ食ノ様ラ云リ  
然レハ對ノ稱スル前ハ茶令ト木綿トノ俗談ヲ用得テ觀ハ  
但レ幸人躰ト見ルヘシ

▲此聯ハ一巻ノ奇絶ト云シ鶴傳ニ古歌ヲ摘ミ猿夢ト云古  
詩ヲ採ル増テ桂川ノ用ヲ評セハ歌仙ハ例ノ三花二月ト云  
或ハ見渡ニ月ヲ含ム桂ノ餘情ヲ稱スヘシ云ハ各町ト云  
人名ト云ト偏差カモ對ノ心得アリテ蘭ト桂トハ絲ニ主ラ  
對シ寺ト川トハ其名ノ奇ナリ譬言ハ蘭寺ニ暖域ト對セシ  
ハ中古ノ藤學ト云キミヤ觀ハ小町ニ逢坂ノ角ナリ  
▲此聯ハ連歌ノ漢和トモ云ハンニ句共ニ詩歌ノ詞ヲ摘テ

顧ハ人望ノ限ナキ觀相ナリ此等ヲ聯句ノ地ト知レハ

▲此聯ハ俳諧ニシテ衛士ノ由賣ヲ待夏ハ四式モ表テ皇居  
ノ京行様ヲ云ル例ニ前向ノ顧ナカラ待ノ字ニ作者  
稱スヘシ本ヨリ衛士ト代官トハ官職ノ品ナカラ字意ノ配ラ  
稱スヘク由ト米トノ附合ハ俳諧ノ笑言ヲ稱スヘケン但レ  
御平ノ貞ノ前ニ米ノ賣買停止ノ制札ハ代官所ノ定法  
▲此聯ハ一轉シテ是ヨリ二折ノ曲節ヲ尽シ及ナリ平家ニ秋  
申ハ申族ノ意對ニシテ花蝶ハ例ノ大和風ナリ去レハ佛功位  
ヲ讚シテ譬言ハ蝶ノ花香ヲ賞ルカ如ク衆生ハ其徳ニ徇ヘトモ  
曾テ其跡ヲ見スト云ル遺教ノ意ヲ攝タルナリ但レ代官ノ觀  
ニ平家ノ表ヘテ附スルハ家語ニ苛政ノ諷詞ト知レシ  
▲此聯ハ十成ノ俳諧ニシテ仏前ノ供物ニ泊ラ置タル彼山屋ノ







▲此聯ハ和漢ヲ錯綜シテ別ニ格ノ備アリト云ヒ史記引漢  
 下九身<sup>キテ</sup>尽<sup>キテ</sup>良<sup>キテ</sup>蔵トハ韓信カ武功ヲ評シタレハ月ニハ  
 前ノ光字ヲ顧テ聯句ニ附心ノ奇絶ト云シ増テヤ古語  
 ヲ翻轉シテ身ノ蔵ルトハ又會ノ會叙ナリ物ヲ故更  
 ヲ殊リ古語ヲ摘ム又ハ此節ニ效<sup>キナリ</sup>音訓ノ附合モ亦有<sup>レ</sup>  
 蔵入ナリ但シ之日ニ二星ノ如キ音訓ノ附合モ亦有<sup>レ</sup>  
 強テ二星ト和訓スヤラス日星ハ例ノ假對ナレバナリ  
 ▲此聯ハ句作ノ奇絶ト云シ晨鐘ニ百ハノハヲ殘シテ東白ノ  
 様ヲ云ルヤル穂ハ橋ノ顧ナリ増テ其對ノ千字ハ時深  
 切ヲ以テ平音ト成セル此等ヲ聯句ノ文覺ト答言<sup>レ</sup>但シ  
 是<sup>テ</sup>花<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>金<sup>カ</sup>香<sup>ヲ</sup>ト云ル古詩ノ詞ヲ轉シテカラ白<sup>ク</sup>是<sup>レ</sup>四ノニ字  
 ニ光彩ノ備ヲ稱ス<sup>レ</sup>

▲此聯ハ名殘曲節ニテ顧ハ節所ノ遊宴ナリ四ニ好色ノ徒  
 人ヲ第トス<sup>テ</sup>某<sup>ノ</sup>釀ト云ルハ歌舞ノ地ノ風言ナリ源氏ニ  
 白宮ナラ<sup>ニ</sup>様<sup>ノ</sup>字ニ俳倡ヲ尽<sup>ス</sup>ナリト云シ依殿ハ願朝ナリ宮  
 殿トノ字對ヲ稱ス<sup>レ</sup>運生坊ヤ殿ノ夏ハ少<sup>ク</sup>京向答要<sup>ス</sup>夏<sup>ニ</sup>  
 ▲此聯ハ録倉ヲ顧テ當時ニ冬平ノ結文ナリ柳箱ハ礼哭ニテ  
 重ト羊トニ吉凶ノ沙汰アリ然ルニ此對ヲ穿鑿セバ柳箱ハ  
 柳箱箱ニテ依主ト自兼トノ釈文ニ據ラ<sup>ニ</sup>花<sup>ヲ</sup>箱ニ對ス  
 へ<sup>テ</sup>花<sup>ヲ</sup>幕ニ對セ<sup>テ</sup>子ト我<sup>ノ</sup>所ノ俳式ニ月花ノ句ハ指テ沈吟  
 セス一座ノ首尾ヲ先トス<sup>レ</sup>然レハ俳句ハ勿論ニシテ其日  
 其時ノ用ヲ知テ法ニ泥ヌ<sup>ラ</sup>時宜ト云ハ<sup>ニ</sup>俳諧ノ世法ナ  
 ラ知ラハ風雅ハ今日ノ優游ナルヲ知<sup>レ</sup>ト<sup>ク</sup>  
 源云<sup>レ</sup>一<sup>ノ</sup>字<sup>ヲ</sup>也<sup>ノ</sup>所<sup>ノ</sup>成<sup>ル</sup>也<sup>ノ</sup>遠<sup>ニ</sup>テ<sup>ハ</sup>其<sup>ノ</sup>妙<sup>ナ</sup>也<sup>ノ</sup>也<sup>ノ</sup>







一、やまゝとて平かひて凡雅の地おきとと少くは兼兼中  
 題の二字ちりとあやしく大小の類此二よあんと  
 ちうし摩訶と阿佉との梵語とびり下二胡粉  
 とりても平の大小と和もして漢も此一方法  
 くらりて仲子聯ととあとりまうしとと又孫の  
 選場はけあるに又選の連珠も又格はゆれをれを  
 採題はあげたはとたふ字大小吟とてけけり  
 聯類とてさうしてとて兼の採られし和漢  
 新格の常用と稱して又番舎のあや  
 序とてさうしてさうや

摩訶

阿佉

一、こつんまろく嘆きり  
 兼此書  
 若菜摘宛表于葛  
 八十年を亦待春

○仔細に辭の序い簡古なる例に能讀めを能ありと  
 移と一減く兼食の一字題ん杜律見題文とて  
 とて質もあつと人の能くあつとふのそけりて周と  
 麻とあつとま本と血とのちあれあんとし可申  
 の可申ありて商家の存懐とゆふんもあつとるに  
 大やの二字との句を楚語の可申ありとて例に  
 凡雅の又ちりて世は有用の質あつとるに



上文章の優劣とある一演連珠とを好む人の  
各七格と文選の陸士衡の文とあり一今の序  
に武蔵守あり一尾の坪下ははるる春田舎を  
ふるふあり

関口聯

おとと唇 ちりり  
あおむら 芭蕉老人

○評云はるるのちりり唇と唐詩のこむちりりおとと唇  
芭蕉庵のちりりちりりと洛の吉兼子とあおむら  
唐柿舎の聯とあむらと一和詩の一行おとと唇  
そおととせよとれちりり

堪忍聯

子訓詩

張昇角

おはふと馬とゆれ 了場の様れりとせふ  
人とんしやいとせふ 此の柿の氷とけはく

○評云此詩は子訓の格とありて一ことと起語と列二は  
と措法とあり起るの語かといはれやこれと  
大和の新格とあり一作者は文皇序と各録あり

鑑亭聯

東花坊

山をたふれむとてんちりり



水と近きな月と云く風と

郭公のお  
時雨の風

そと澄き此あらしむ

いしと水と雲とあらし

そと澄き平の

雲と水と雲と澄き

やうくわ

○伊予澄きと却の新浮しありて北七里ふふ  
ありきりにて時のおま行とそとあし板とありて  
あらしと水澄の野航しして柳雪をそと此澄き  
あらしと水澄のせよ二牧ありて百世のま論も  
かんとこにそとあしと澄き平ののせ

五字聯

いふとや柑

孫まろく眠し心

猪のあしんうれ

おとほ

○伊予澄きと伊中の念をいりて素秋平の景がし  
そとあらしと水澄のま子と澄きあらしと水澄の  
澄きの高きありていりて誤研とれう今のま  
あらしと一牧の聯とあらしとあらしと水澄の  
あらしと水澄の子僧と打殺とてしあらしと水澄の  
十郎あらしと水澄と水澄の長















てん梅樹よあそひなまふありてへり梅よあそひ菅野の  
以て菅野人とあそひてり梅野村の時いふ名とあそひ  
皆ぞく天のおそおれりて貴族令福と人のくさ  
りさうりきり

○註曰直遙遊ノ二字ハ在子ノ篇名ナリ遠註遊者心有天  
遊也云梅ニ此序ハ東濃ノ菅野中羽集ニ在テ菅野各  
ヲ假テ四年ノ狩ヲ分ケ其ノ一ノ備ノ序詞ナリ羽集上羽集註  
ノ意ヲ運ヘリトフ○詩經ニ鳥飛ノ庄天ニ魚躍ノ例ニ列仙傳  
丁固字仙術也為白鶴也○仏祖統紀ニ觀音ノ美女ト化  
シテ馬郎婦ト成テ王ヲ奪リ例ノ十九應身ナリ  
○評云此序ハ今ク在子ノ文化ナリテ菅野本々秋の石

一寓も遊の一子と形容と一ノ丁固ノ親善との例  
心くわくと在子とを地くくする端の鼓舞といはれ  
次や心事の道意ノ貴族令福の親おとさるる遊人  
の世におとほるとさるる例の孤諫とさるるて例ノ管中  
の月とあそひて一撰者と文鑑ノ姓名ありてかみ  
祖又あそひてり梅子の親おとさるる菅野のり  
あそひてりて道ノ断弦の歎とあそひてり

二見文基繪序

張昇角

おろけにその痛といせの園此をよせとれとそむの  
而も字一てたうとそむる流連とさるるたうそむる



とかまのちと西の人の風物とまゝに〜我々のなるの我  
 おきりあつてもおむらうとてふ所の付極くは抑極くを静  
 の處と〜とぬい第其極く静むの處とまゝ〜と處に  
 邊人の月と〜とぬい色愈々静むの處とまゝ〜と處に  
 細波のありのち〜とぬい静むの處とまゝ〜と處に  
 如極くむら〜とぬい静むの處とまゝ〜と處に  
 てた〜とぬい静むの處とまゝ〜と處に  
 く倒めち〜とぬい静むの處とまゝ〜と處に  
 〓想のせお〜とぬい静むの處とまゝ〜と處に  
 せ〜とぬい静むの處とまゝ〜と處に

梅とち〜とぬい静むの處とまゝ〜と處に  
 もあ〜とぬい静むの處とまゝ〜と處に  
 あり〜とぬい静むの處とまゝ〜と處に  
 は〜とぬい静むの處とまゝ〜と處に  
 ら〜とぬい静むの處とまゝ〜と處に  
 も〜とぬい静むの處とまゝ〜と處に  
 〓氣約の静のば〜とぬい静むの處とまゝ〜と處に  
 り〜とぬい静むの處とまゝ〜と處に  
 天下〜とぬい静むの處とまゝ〜と處に

〓註の〓西のち〜とぬい静むの處とまゝ〜と處に



○又ゆるねのあつきを△西行上人の住する所ハ二見ノ西吹ト云フ里ニ  
 山名ニ扇ヲ敷テ文基トセシ其跡ハ今ニ在リトフ△十論能信  
 一ノ條のはあり△世情の人私を論め常は一ノあり  
 三ノ條のるをみる△世情の解とみる  
 △論語繪事後素ヲ云△按スニ此二字ハ結前生後  
 ノ常ナカラ此等ニ文章ノ新續ヲ知レ△海松ニ蛤硯箱  
 ノ繪ナリ然ラ少兩用ニ書スルハ五老井作ナリトフ硯箱名ニ為辨  
 折ニ在リ△文臺圖ノ下ニ見レ○松梅ノ證文トハ康書後句  
 「三つん」と松のあり上梅の月とあり△按スニ此康書洛  
 ノ抄後圖ヲ始ナリト云テ五老井ノ云レ圖ハ松朝日ヲ昏ク  
 △トト緑色ナラ子ニ紡ハレニ見ニ松ハ論カクノ梅ハ臘月ノ圖モ  
 ナリテ故云羽ノ筆跡ナリトテ其後ハ梅ナリモ昏トトフ

○康書ノ言解ナリ△ゆくとくともやちとりのかゝるらん  
 かゝるの非のあらんかゝるらん△智多ハ尾張ノ郡ニテ万歳  
 ノ出所ナリ△按スニ此一對ハ一篇ノ要文ニシテ山石ト扇トノ不形  
 ナラヤカラ△此序ノ辞宜ラ調ヘ△此文ノ証語ヲ尺ニせん  
 字對句對ハ例ノ言ハス△此意對ノ絶妙ト稱スレ△夏林廣記  
 繪ノ法格アリ△氣韻生動ハ六法ノ才ニメる老而簡ハ八格  
 ノ才ナリ△細筆スレ△暇アラス△白馬文章訓ニ能讀ノ文章ハ  
 無用ノ用アリテ合書新快ハ有用ノ用アリト云△按ス此詞  
 ハ文字ノ人ノ要言ヲ文章ノ意地ハ此簡ニ知レキナリ  
 ○評云はるる△此内の書あり△三つんと書くの由未  
 不明ナリ△百世ノ船窓の洞をさるる△やちとりの始  
 中終の次第とるる△一作をと尾符の各讀屋ト







○一後とひらりしを述べ△奉長茶と石下八祖の歌言  
 たり十論法式下に出たり△殿封畧史三金毛九尾野狐  
 ありテ姐已ト化して国家ヲ乱セリト細奉ニ及ハス△古今集  
 序△秋のゆふは秋の川にありありおききとて帝の御内を降と  
 るくひ△今昔のあしとくしゆのゆくくと人を知るゝとてし  
 とのくふむしゆのあしとくしゆ△厚玉ハ夜ト云く同ト云く枕詞なり  
 去ルシ有墨ノ詞寄セえ俳諧ノ微中ヲ稱スレ世等ハ句對ニ  
 似テ凡是ヲ文對ト知テナリ△羊頭ヲ尊ト成と羊頭ヲ  
 尊ト成セル中古ノ檀林嘯ニ在リ物語ノ三子ノ起結ナリ  
 △嘯州ト百題ノ用ナカラ嘯ノ字ヲ夜寒ノ物結ト成セル  
 文ノ新續ヲ見キナリ  
 ○讀むはたしむはむすのそくをに一冊の授けのり也

ろろこくと茶んくと主あもてつひ能治るこもや  
 つまこつて一箇の終りも不ハ九尾ト七尾の詞の富  
 くり四子子の化地のあしとくしゆまはまはまは能治  
 の百物語として一作者と山城中として能治の  
 七尾の終りも者来子の仲の柳をうり或と一鬼橋  
 としや方ゆまくと一箇の能治として一

愛百合序 並詩

東乙文

我前水陸竹木之花者徒抽也櫻之咲月  
 惜藤山吹之春而愛牡丹則思芳茶居愛



菊則思水仙歷在者如董大將之所慕  
手習之君愛情者不忌其面影則也于然  
牡丹者被生達魏姚之家而盛李唐之間  
也則居子之障子厥日居詩繪之筆司儼  
露而玉妃麼霞湯上之面詳殆不耻千金  
之價要徒是風通我朝止乎元祿之後者  
被麗而菊之名而牡丹者知有而無也  
增而不染此世之得蓮花之有仰噴  
愛情者例之可識厚哉友在則所我鄉之  
榛菓子者離蓮幽之氣之古風而園植色々

之百合而且培之文灌之不<sub>作</sub>十二一室  
之襟矣共紅白自有品而如頭插之如居  
眠兮隨風而有為彼地等向了者徒本謂  
此花之愛相矣爾有則榛公之所好者和  
漢尋純教奇之色而彼方慕卓文君之前  
室居此方弄木摘花之假看要友有者所  
謂年月厚經了共露不忘給弗其人之本  
情正耶但者效或法師之物教奇而可謂  
玉色之有色隱者矣乎  
百合不誇蘭菊名自斬芍菜似傾城















